

実践報告

オムニバス形式授業による海外留学促進講座の意義と課題

天木 勇樹^ASignificance and Challenges of a Team-Taught Course
Promoting Study AbroadYuki AMAKI^A

Abstract: Students enrolled in a team-taught course promoting study abroad were given a survey. The survey was designed to track three separate changes in the way students thought about study abroad after having completed the course. Specifically, the objectives were to track changes in (1) what goals students associated with study abroad, and (2) what types of international programs they considered when planning their own study abroad experience. The third aim of the survey was to analyze (3) what influence the course might have had on students' career goals. The course format, consisting of a series of guest lectures, was designed to promote study abroad, and to encourage more students to work overseas after college. The course consisting of 12 guest lectures was offered to provide an opportunity to hear from individuals with various kinds of overseas experience. The course focused on promoting both short-term and long-term study-abroad programs and global internship programs for those wishing to pursue careers within international organizations. Drawing on the various perspectives of the 12 guest speakers, the course was designed to help students plan study abroad and eventually become fully engaged members of the global community. The 173 students who responded to this survey questionnaire were interested in studying abroad. Also, reflective papers on guest speakers were used in the analysis of the qualitative research. The survey found that they offered valuable insight as to how the course changed their values and motivation for study abroad, though the course did not greatly affect the types of study abroad programs they chose or their future career plans.

Keywords: higher education, team teaching, study abroad preparation, global careers, undergraduate

キーワード：高等教育、チームティーチング、海外留学準備、グローバルキャリア、学士課程

1 はじめに

1.1 留学の意義を考える

グローバル化が進展する社会の中で、国際的に活躍できる人材に求められる能力は多様化し、国際社会が求める人材として必要な素養を身に付けるために、留学が果たす役割は計り知れないものがあると考えられる。留学は、異なる環境で育った様々な学生たちと知り合いになり意見を交わすことを通して、他の文化や価値観を受け入れることができる柔軟性に富んだ人材に成長

する機会を得る場である。留学生活では、日本の大学生生活とは異なり、文化や言葉の壁など様々な困難に直面する。明確な目標や目的を持ち、失敗を恐れずに何事にも無我夢中で取り組むことが留学生生活を成功に導くための大切な鍵となる。これらのことを著者自身も十年間におよぶ米国留学を通し学んだ。留学する学生の性格に向き不向きなどなく、精神的にタフになれるかどうかは重要である。失敗や挫折という経験は決して遠回りなどではなく、失敗から学ぶことも沢山あり、留学経験は必ず自分自身の人生における財産になると著者が担当する講義で学生たちにいつも伝えてい

A: 明治大学国際連携機構

る。

本学は、世界 300 大学と協定を結び、様々な国に学生たちを送り出している。本学全体の国際化推進の責務を担う国際連携機構や国際教育センターが、海外大学との学生交流、留学生サポート等、様々な形で留学推進を行っている。この様な取り組みによって、現在、本学在籍期間中に長期留学や短期留学等で海外へ渡る学生数は毎年 1,500 人以上となり、年々増加傾向にある。各学部や国際教育センターでは、海外留学に向け効率的かつ効果的に準備・計画を進め、実現していくためにいくつかの留学準備講座を開講している。その一つが、国内外で活躍する留学経験者による講演や留学後のキャリア形成等について議論する「国際キャリア特論－留学のすすめ－」(全学部対象科目)である。本稿では、「国際キャリア特論－留学のすすめ－」の概要と特色、学生の留学目的や留学に対する不安等の変化、学生が目指す就職先や進路に関する意識の変容について、講義初日と講義最終日にアンケート調査を行った結果について分析し、オムニバス形式による留学促進講座の今後の展開について考察する。

1.2 「国際キャリア特論－留学のすすめ－」の特色

本学では国際的に活躍できる人材に必要とされる素養の備わった人材を育成するためのカリキュラム改革、海外協定校数の拡大や海外留学推進プログラムの開発等が進められている。その一環として 2011 年度から全学部の学生が受講可能な留学促進講座「国際キャリア特論－留学のすすめ－」を開講した。本講座は、国内外で活躍する社会人をゲスト講師として毎週招聘し、留学の価値、キャリア設計において留学が果たす役割、留学を通じて高めることができる能力についての講座を通じ、受講者の留学に対する意識を高めていくことを目的としている。さらに、カルチャーショックや逆カルチャーショックなど、留学体験から派生する課題について議論し、異文化適応能力の意義についても学んでいく。入学後の早い段階から多くの学生が、明確なキャリア意識を持ち、一学期間から一年間の長期交換留学、四週間程度の短期海外研修や、二週間から一学期間の海外インターンシップなどに参加するように促し、受講者に自らのキャリア・デザインの在り方を客観的に分析する機会を提供しているのが本講座の特色である。

1.3 「国際キャリア特論－留学のすすめ－」の概要

本講座の概要は以下の表 1 及び表 2 の通りである。

表 1 国際キャリア特論－留学のすすめ－シラバス

【単位数】	2 単位	【開講期】	春学期
【授業の概要・到達目標】			
本講座では、国際的に活躍する講演者たちが自身の留学体験や海外での勤務経験をもとに、留学の意義や留学が自身の人生にもたらした変化などについて講演し、受講者は講演者の経験した実例をもとに、受講者の留学に対する意識を高めていくことを目的としている。学生は本講座を通じて、海外留学に対する明確な目的や目標を持つことの重要性を認識し、海外に目を向け、異なるバックグラウンドを持つ人々との交流や海外生活での学びに強い意欲を持つとともに、短期留学や長期留学等の海外留学に挑戦する人材として必要になる素養を身に付けることを到達目標とする。			
【準備学習（予習・復習等）の内容】			
事前に、次週のゲスト講師の著書等を読み、予備知識を得ておくこと。復習として、ゲスト講師の話や討論をもとにした振り返りのレポート（リアクションペーパー）を毎週作成する。			
【成績評価の方法】			
以下の諸点により、最終評価を行う。 （１）授業における貢献度：40% ※授業の中で自主的に課題を発表し、積極的に発言することを評価する。 （２）リアクションペーパー：30% ※ゲスト講師の話や討論をもとにした振り返りのレポートを毎週作成すること。（A4 用紙 1 枚、文字数：1,000 字～1,100 字以内） （３）期末レポート：30% ※本講座で学んだことをもとに、レポートをまとめること。（A4 用紙 1 枚、文字数：1,400 字～1,500 字以内）			

表 2 講師一覧

	講義テーマ	ゲスト講師
1	イントロダクション：海外留学の意義について	担当教員
2	English Study Methods to Prepare for Your Study Abroad	安河内 哲也 (東進ハイスクール英語講師)
3	グローバルに活躍するための「伝える極意」	長井 鞠子 (会議通訳者/株式会社サイマル・インターナショナル顧問)

	講義テーマ	ゲスト講師
4	グローバル社会の中で自分をどのように磨けばよいのか？新時代は英語力ではなく発信力で勝ち抜く！	ルーシー・ジャーマン (株式会社ジャーマン・インターナショナル代表取締役)
5	世界を知ろう！英文報道の現場から見えること	大門 小百合 (株式会社ジャパンタイムズ執行役員)
6	海外に出る大事さ	吉田 ちか (動画クリエイター)
7	若者 (あなた) がきっと世界を変える	三輪 開人 (NPO 法人 e-Education 代表)
8	パリの国連で夢を食う。	川内 有緒 (ノンフィクション作家)
9	ライフネット生命の挑戦	岩瀬 大輔 (ライフネット生命保険株式会社代表取締役社長)
10	Follow Your Passion	松田 悠介 (認定 NPO 法人 Teach For Japan 創設者)
11	Believe in Yourself ー海外留学で得た人生への自信ー	南 壮一郎 (株式会社ビズリーチ代表取締役社長)
12	世界から国際 NGO へ	吉岡 利代 (国際人権 NGO Human Rights Watch 上級プログラムオフィサー)
13	次世代マインド Global Citizenship & 未来づくり Workshop	辰野 まどか (一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト専務理事兼事務局長)
14	総括 講義全体の振り返り	担当教員

1.4 研究の目的

オムニバス形式の授業を通じ、学生の留学目的や留学形態などにどのような変化が起こっているのかについてのアンケート調査結果を分析する。また、学生のキャリア意識にどのような変化が起こっているのかについて調査する。さらに、オムニバス形式による授業が海外留学を希望する学生に与える意識の変化についてゲスト講師の講義に関する振り返りレポートを質的データとして分析し、オムニバス形式による留学促進講座の意義と今後の課題について明示する。

2 調査概要

2.1 調査方法 (量的調査)

本調査では、本学が毎年春学期に開講する学部間共通講座「国際キャリア特論ー留学のすすめー」を受講する学生を対象に第1回目の授業と第14回目の授業最終日にアンケート調査を実施し、履修学生の海外留学先や留学形態の変化、就職希望先等についてのキャリア意識の変化を調査する。

アンケート調査の質問項目とそれぞれの分析内容を以下に示す。本調査で使用した調査紙の詳細は付録[1]を参照のこと。

【問1】基本データ (学年)

文系学生のみが在籍するキャンパスで実施したため、文系・理系の区分を設けていない。また、回答者個人を特定する可能性があるため性別区分も含めていない。

【問2】一番関心がある留学形態

【問3】留学希望先国

【問4】留学目的

学生の留学目的については、長期留学及び短期留学に参加する学生60名を対象に記述式で行った事前調査の結果を踏まえて、回答数が多かった11項目を本調査の選択項目として用意した。留学目的は11の目的から学生の気持ちに一番近いものを3つ選ぶことができる。選択項目を1つに絞った場合、「語学力の向上」を選ぶ学生が8割～9割以上になる可能性があるため、留学目的として一番近いものを3つ選ぶよう求めた。本講座の授業初日と最終日での留学目的に関する学生の意識の変化を調査する。

【問5】留学に対する不安・心配

留学に対する不安や心配なことについても、事前調査の結果を踏まえ、8つの選択肢から学生の気持ちに一番近いものを3つ選択することができる。12名のゲスト講師からの授業を通じ、授業初日と最終日での不安や心配なことに関する学生の意識の変化について調査する。

【問6】就職希望先・希望進路

本講座の授業初日と最終日での学生の就職意向の変化について調べる。海外勤務の可能性の有無を含めた国内企業及び海外企業、国内外の大学院進学を選択肢に含めた。

【問 7】留学を検討する際に必要な準備サポート
 学生が求める留学準備サポートサービスについて、
 本講座の授業初日と最終日で学生が必要とするサポート
 体制に変化があるのか調査する。

2.2 調査方法（質的調査）

講義終了後に振り返りレポートを提出することが成績評価の一つであり、講義を受けた学生の反応は様々である。各講義の振り返りレポートを質的データとして扱い、本講座が学生に与える意識の変化について考察する。

3 調査結果

3.1 回答者の概要（量的調査結果）

本調査での有効回答数は、講義初日では173件
 （学部1年生100人、2年生73人）、講義最終日では165件（1年生94人、2年生71人）である。

3.2 留学形態

学生の中で一番関心がある留学形態は多い順に、表3の通りである。講義初日と講義最終日で比較すると、休学して私費で長期留学を希望する学生が講義最終日の調査では僅かに増えたことが示されたが、全体的に学生が希望する留学形態については大きな変化は見られなかった。

表3 留学形態

講義初回日		講義最終日	
半年から1年間の交換留学	52%	半年から1年間の交換留学	47.3%
2週間から4週間程度の短期語学研修	30.6%	2週間から4週間程度の短期語学研修	24.8%
休学して半年から1年間の私費留学	6.9%	休学して半年から1年間の私費留学	14.5%
6ヶ月程度の長期海外インターンシップ	8.1%	2週間から4週間程度の短期海外インターンシップ	7.9%
2週間から4週間程度の短期海外インターンシップ	2.3%	6ヶ月程度の長期海外インターンシップ	5.5%

3.3 留学希望先国

一番留学したいと思う国について調査した結果は、表4の通りである。北米への留学希望者が最も多かった一方で、オセアニアの大学への留学希望者が講義初日と比べ、講義最終日には半減していることが示され

た。イギリス英語やアメリカ英語に比べ、オーストラリ英語にあまり馴染みがないことや長期留学のための語学要件が他国に比べ高いことなどが理由として考えられるが、確たる理由が思い当たらないため、今後、インタビュー調査を通じ、半減した理由について調査する必要がある。全体的に見ると、学生が希望する留学形態と同様に留学希望先国についても講義初日と講義最終日では大きな差は見られなかった。

表4 留学希望先国

講義初回日		講義最終日	
北米（アメリカ合衆国・カナダ）	53.2%	北米（アメリカ合衆国・カナダ）	56.4%
ヨーロッパ（フランス、ドイツ等）	26.2%	ヨーロッパ（フランス、ドイツ等）	24.2%
オセアニア（オーストラリア、ニュージーランド等）	12.1%	東南アジア（シンガポール、タイ等）	6.7%
東アジア（中国、韓国等）	3.5%	東アジア（中国、韓国等）	4.8%
東南アジア（シンガポール、タイ等）	2.9%	アフリカ（南アフリカ、ケニア等）	1.2%
中南米（メキシコ、ブラジル等）	1.7%	東欧（ロシア等）	0.6%

3.4 海外留学の目的

海外留学の目的について11項目から一番当てはまるものを3つ選択するように求めた。本調査の結果、表5に示してあるように、本講座参加前後では、講義初日より回答者が増えた項目が3つある。まず、「語学力を向上させたいから」を選択した学生は、講義初日の69.4%から講義最終日には75.2%に増加した。次に、「周囲の人たちと違う経験をしたいため」を選択した学生は、講義初日の8.1%から最終日は18.2%に増加した。また、「国際感覚を身につけたいから」を選択した学生は、講義初日の21.5%から講義最終日には31.5%にまで増加した。留学体験や海外での勤務経験があるゲスト講師らは、英語を学ぶことのみを最終目的とするのではなく、コミュニケーションの道具として英語を使いこなし、自分自身の目的を成し遂げることが最終目的であると力説したことが学生の意識に影響した可能性がある。また、様々な経歴を持つゲスト講師の話聞き、学生一人ひとりが在学中にコンフォートゾーンから抜け出し、「留学」という周囲とは異なることに挑戦する気持ちが高まっていることが推測できる。

一方で、講義初日に比べ講義最終日に回答者が減った留学目的の項目が4つある。一つ目は、「異文化の中での生活を通じ、視野が広がると思うから」を選択した学生は、講義初日の69.9%から最終日には61.2%に減少した。次に、「コミュニケーション能力を高めたいから」を選択した学生も講義初日の28.3%から最終日には21.2%に僅かに減ったことが示された。また、「国内外のグローバル企業に就職したいから」を選択した学生は、講義初日の25.4%から講義最終日に15.8%に減少した。「海外で働きたいから」を選択した学生は、講義初日の20.8%から講義最終日には13.9%に減少したことが示された。就職先としてグローバル企業や海外勤務を希望する学生が減った理由について、インタビュー調査を通じ、さらに分析する必要がある。今後は、国内に勤務しているゲスト講師だけではなく、海外で勤務しているゲスト講師に現地から Skype 等を通じ特別講義をお願いし、グローバル企業や海外勤務が求める人材とはどのような素養の備わった人材であるかについて話を聞くことにより、学生一人ひとりが海外留学や英語の重要性を認識し、学生自身のキャリア・プランの幅が広がると考える。

表5 海外留学の目的の意識の変容

留学目的	講義初回目	講義最終日
語学力の向上	69.4%	75.2%
視野の拡大	69.9%	61.2%
行動力と自信の獲得	37.6%	35.8%
コミュニケーション能力の向上	28.3%	21.2%
国内外のグローバル企業への就職準備	25.4%	15.8%
就職に有利	13.9%	13.9%
周囲と異なる経験希望	8.1%	18.2%
外国人の友人作り	9.2%	12.1%
海外勤務希望	20.8%	13.9%
専門知識の習得	11.6%	8.5%
国際感覚の習得	21.5%	31.5%

3.5 留学に対する不安・心配

留学に対する不安や心配なことについて、8つの項目の中から3つ選ぶよう求めた。本調査の結果、表6に示してあるように、講義初日と講義最終日を比較した際に、変化が見られた項目がある。「留学の費用が心配である（経済的な理由）」を選択した学生は、講義初日の69.4%から講義最終日は61.2%に僅かに減少した。講義とは別に様々な留学プログラムの募集説明会などでも留学奨学金の情報提供を随時行っていることもあ

り、学生たちの経済的な面での不安が少し軽減されたのではないかと推測できる。また、「就職活動などの時期との兼ね合いが不安である」を選択した学生は、講義初日の32.4%から講義最終日には22.4%に減少した。就職活動と留学の兼ね合いに対する不安については、多くのゲスト講師たちが、海外留学経験者を積極的に採用する企業が多数出展する米国ボストンで開催される就職イベント（ボストンキャリアフォーラム）等の情報提供を行っているため、留学経験者は就職活動に不利であると考えていた学生たちが減ったことが考えられる。

表6 海外留学に対する不安・心配

留学に対する不安・心配	講義初回目	講義最終日
語学力不足	68.8%	69.7%
経済的負担	69.4%	61.2%
卒業時期	31.2%	30.3%
留学先の授業レベル	54.3%	58.8%
現地生活での環境適応力	25.4%	15.8%
就職活動との兼ね合い	32.4%	22.4%
親や家族の理解	9.2%	6.7%

3.6 就職希望先・希望進路

本講座の授業初日と最終日において、将来目指す就職先や希望進路について、第1志望と第2志望を選択するように求め、学生の就職意向の変化を調査した。図1は第1志望の就職希望先や進路である。本調査の結果、図1で示してあるように、授業初日と授業最終日ともに海外勤務の可能性がある日本企業を志望する学生が約4割を占め、次いで海外勤務の可能性がある外資系企業を選択した学生も授業初日と最終日ともに2割程度にとどまり大きな変化が見られなかった。海外勤務の可能性がある日本企業を選択した学生は授業初日と最終日ともに15%程度であり、海外の現地企業での就職希望者は授業初日と最終日では1割程度にとどまった。全ての項目において、第1希望の就職希望先については大きな変化が見られなかった。

一方で、第2志望では本講座初日と最終日では、学生の就職意向に大きな変化が見られた。図2は第2志望の就職希望先や希望進路である。授業初日と最終日において大きな変化が示された就職希望先を見ると、日本企業（海外勤務の可能性あり）を選択した学生は、講義初日の17.4%から講義最終日には24.2%に増加した。外資系企業（海外勤務の可能性あり）では講義初日の18.6%から講義最終日には32.7%に増加した。第

2 志望の就職希望先ではあるが、このことからゲスト講師のキャリアに関する話が、学生たちのキャリア意識に影響を与えていることがわかる。

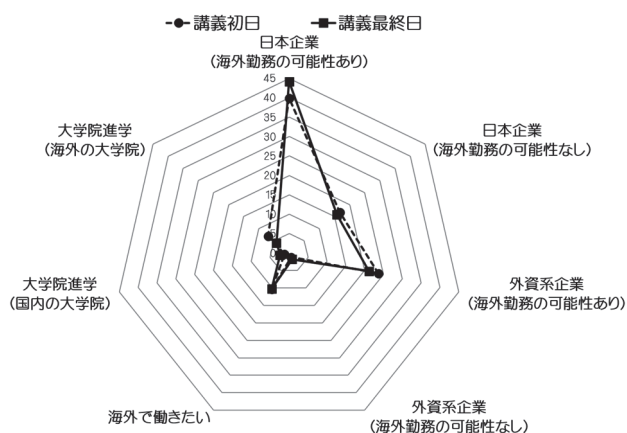


図1 将来の就職先や進路 (第1志望)

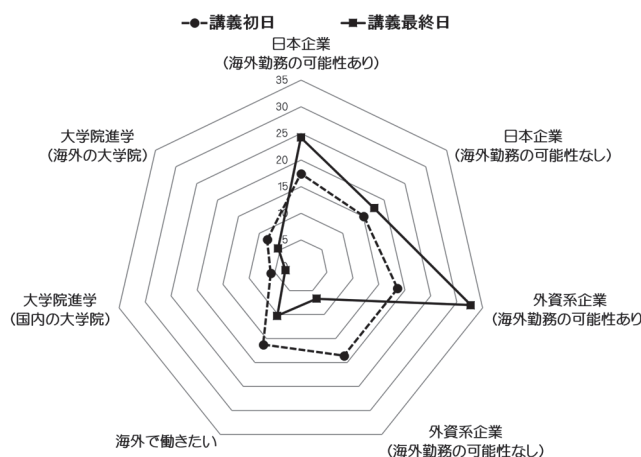


図2 将来の就職先や進路 (第2志望)

また、講義初日より就職希望先として選択した学生が減った就職希望先がある。外資系企業（海外勤務の可能性なし）は、講義初日の18.6%から講義最終日は6.7%に減少した。海外での就職希望を選択した学生は、講義初日には16.3%であったが、講義最終日には10.3%にまで減ったことがわかった。本講座を通じ、海外留学への意識は高まっているが、大学卒業後、海外で働きたいと考える学生は少ないことがわかる。その他の項目では、あまり大きな差は示されなかった。株式会社ディスコキャリアリサーチ（2017）が正規留学、交換留学、語学留学などに参加した日本人留学生507名を対象に行った調査では、ぜひ海外で勤務したいと回答した学生が72.8%、どちらかといえば働きた

いと回答した学生が19.1%となり、海外勤務を希望する学生が9割を超えているという調査結果がある¹⁾。大学在学中の留学又は社会人留学を経験した130名を対象にICC国際交流委員会（2017）が行った現在の勤務先に関する調査では、日系企業が76%、残りの24%が外資系企業であった²⁾。

本講座は留学希望の学生が履修しているが、海外留学未経験の学生に対し、海外で働きたいというキャリア意識を高めることは難しいことがわかる。受講者は大学1年生または2年生であるため、就職希望先については漠然としたイメージだけであり、明確な目標が定まっていないことも考えられる。

3.7 留学を検討する際に必要なサポート

学生が海外留学を検討する際に必要だと思うサポートについての項目において複数選択を求めた結果、講義初日と講義最終日では大きな変化が示されなかった。学生が希望するサポート制度の選択肢の中で多い順に、留学経験のある学生による留学相談会の提供であり、講義初日と講義最終日ともに約6割を占めた。先輩や後輩などの中で実際に留学経験のある学生からのアドバイスを求めている学生が多いことがわかる。次いで、留学相談を行う留学カウンセリングの提供についても約6割、留学に役立つ留学準備講座の提供は約5割、短期留学や長期留学に関する留学説明会を選択した学生は約3割に留まった。本学では、2017年度から留学経験者による学生留学アドバイザーを設け、学生自身の留学経験に基づく留学アドバイスを気軽に受けることができる交流の場を提供している。また、留学準備における悩みや相談においても、3名の留学カウンセラーが個別相談に応じる支援サービスを設け、万全の体制で学生一人ひとりの留学準備サポートを行っている。

3.8 受講後の学生の意識の変化（質的調査結果）

学生の講義に関する振り返りのレポートについて、学生が重要であると認識している点に着目し、データをコーディングしカテゴリ化を行なった。学生の授業に対する反応は様々であるが、カテゴリ化した結果、海外留学に際し、学生は3つの重要性を認識していることが示された。1つ目はコミュニケーションの道具としての英語、2つ目はアイデンティティの確立、3つ

目は行動力や積極性である。

3.8.1 コミュニケーションの道具としての英語

学生は、コミュニケーションの道具としての英語の重要性を認識している。東進ハイスクール講師の安河内氏は、海外留学に行く重要性や留学前に実践的な英語を習得する学習方法などについての講義を行った。学生はコミュニケーションの道具としての言葉の大切さと自分の意見や考えをはっきりと伝えることの重要性を強く認識していることがわかる。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生A：世界で活躍するためには、もっと積極性を持つこと、オープンに人と関わることが必要であると学んだ。また、留学に行くのは英語を勉強するためではなく、活字情報を実体化するためだという言葉には、改めて自分の目で世界を見ることの重要性に気づかされた。自分の自信のなさを見つめ直し、できない自分をしっかり受け入れる必要がある。自信の無さは自分の能力を制限し、できることの幅も狭まる。上達していくためにも、英語が流暢でない自分をきちんと受け入れて、英語をどんどん勉強していきたいと思う。

また、会議通訳者の長井氏は、グローバルに活躍するための伝える極意と題し、言葉や国境を越えて活躍するために大切なことは何かについて学生に伝えた。会議通訳者として活躍する長井氏が話す言葉には重みがあり、母国語ではない言葉でコミュニケーションを取ることの難しさを学生たちに伝えることと同時に、相手に自分の意志を伝えるためには、情熱 (Passion)、内容 (Content)、技術 (Skill) の3つを上手く組み合わせることが最も重要であることを力説した。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生B：長井さんは、長年に渡って数多くの首脳会議の通訳をされ、2020年の東京オリンピックの招致に関わっておられ、「伝える」プロだという印象を持った。初めはどんな努力をしたのだろうとか、どんなテクニックを教えるのだろうと構えました。しかし、長井さんが教えてくださった「伝える極意」はたったの3つ (Passion, Content, and Skill) だった。最初に聞いた時は、それだけでは大雑把すぎると思ったが、

後から大事なことに気がついた。それは、「伝えるのはあくまで自分」ということだ。この3つのポイントを軸に自分なりの伝え方を探していかなければと思った。

3.8.2 アイデンティティの確立

ゲスト講師の講義を通じ、学生は、異なるバックグラウンドを持つ人々と交流を図る際に自分自身を知り、自身のアイデンティティを持つことの重要性を認識していることが示された。株式会社ジャーマン・インターナショナルのジャーマン氏は、日本滞在歴30年以上のキャリアを通じ、グローバル社会の中で、自分をどのように磨けばよいのかについて力説した。講義を通じ、異文化の環境の中では、異なる文化や価値観等の全てを受け入れる必要はなく、日本人としてのアイデンティティをしっかりと持ち、臨機応変に対応することが必要であることを学生たちに伝えた。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生C：留学に対する考え方が変わった。そして、これからのグローバル化に向けて私たちが外国の人たちとどのように接していくべきか考えさせられる非常に興味深い講義だった。海外に行くと、自分が当たり前のことが、海外では受け入れられず、逆のパターンも多くあると思う。そういった時に、「自分のアイデンティティは守るべき」とおっしゃったジャーマンさんの言葉は非常に重みがあり、自分を理解してもらう上でも、相手を理解する上でも、譲れないものを言えることが、異なる文化を持つ人々との関係の中で大切であると思った。

また、ノンフィクション作家の川内氏は、自身の海外経験から得た人生論を語り、学生自身の将来の生き方や価値観に影響を与えていることがわかる。川内氏は他のゲスト講師とは異なり、人生の中でロールモデルを必ずしも見つける必要はなく、人生に「線路はなく、特急列車も目的地も正解もない」という川内氏の言葉は、これからの進路に迷っている学生たちが海外留学という選択肢を選ぶ上でも背中を押してくれる言葉になったのではないかと考える。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生D：大切であると感じたことは、「衝動で動いても、

何とかなるだろう」と思えるようになったことだ。講義の中で話されていたように人生は衝動で動く時があり、その衝動はとても大きなものなので損得を与えないで思いっきり飛び込むべき時があるということだ。次に、「留学は、自分を変えられることができる」ということだ。現地の生活や文化を経験することで、自分を変え、自分自身を成長させることができるきっかけとなる。川内さんに気付かされた2つのことを実践できれば、経験に基づく自分のアイデンティティが確立され、グローバルに生きられる自信がつくと感じた。

ライフネット生命保険株式会社の岩瀬氏は、ハーバード大学大学院留学を通じ修得したことや帰国後のライフネット生命保険設立に参画した経緯など、留学とキャリアについて語った。岩瀬氏は、自身の海外留学が一つの起爆剤となり、留学後の人生においても様々な影響を与えていることが、学生たちに伝わっていることがわかる。岩瀬氏は、何かに挑戦している人をロールモデルとして見つけ、常に明確な目標を持ち、その目標の実現のために努力することの重要性を学生たちに伝えた。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生 E：岩瀬さんの話から、ほとんどの外国人が自分の国に対して誇りを持ち、自国の歴史などもしっかり知っているということがわかった。今まで、自分のアイデンティティを意識していなかったが、留学中に、これが自分のアイデンティティであるとしっかりと主張できるようになりたいと思った。また、Planned Happenstance (計画された偶然性) など、興味深い言葉や話を聞くことができ、偶然といっても、しっかりと準備をしている人にしか偶然は起こらないので、講義でも話されていた好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心のあらゆる面で、将来の準備をする必要があると感じた。

3.8.3 行動力と積極性

講義を通じ、英語を学ぶことのみを最終目的とするのではなく、海外生活で特に必要とされる行動力と積極性を持ち、自分の目的を成し遂げることが最終目標であることを学生は認識している。ジャパントイムズの大門氏は、米国、ニュージーランド、サウジアラビ

アでの自身の海外経験から得られたことについて語った。英語はコミュニケーションの道具に過ぎず、重要なことは自分の意志で物事を考え、積極的に行動を起こすことこそが、将来、世界を舞台に活躍できる人材となるために必要なことであることを力説した。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生 F：これから求められる力は、宇宙船の中で生きる力だという大門さんの言葉にはとても共感した。確かに、宇宙船内は現代のグローバル社会の縮図と捉えることができる。そこで求められる力の一つである常識の外側から考えることのできる力は、多くの人にとって訓練しないと手に入らないものだろう。その中でも「Ability to think outside the box.」は、私が手に入れたと思っている力で、枠に捉われずに考えることの必要性を感じていた。特にこれからは発想力が求められる時代だと思うので、その力を鍛えていこうと考えている。

また、Teach for Japan 創業者の松田氏は、留学することから得られた価値や、留学したからこそ踏み込むことができた社会起業の世界について講義した。松田氏の話聞き、学生は、これからの人生の中で直面する様々な困難や苦勞をどのように乗り越え、その困難を克服した経験を留学先や帰国後にどのように活かすことができるのかについて考えることの重要性を学んだことが伺える。以下、学生の振り返りレポートの一部である。

学生 G：留学ということだけでなく自分の生き方についても考えさせられた。松田さんは教育の現場に違和感を覚え、教育を変えたいと思ったからこそ、留学を決めた。留学の形としては、様々なものがあると思うが、このように明確な目標を持って留学する場合とそうでない場合がある。私は、生き方を考えた時に、逆境を大事にしたいと思った。逆境があっても人は成長できるし、そこでそれについて考えてみることで、色々とわかってくるのではないかなと思う。そこで、松田さんの言っていた推進力をもった飛行機は、風 (逆境) をうけて初めて飛ぶことができるという話を聞き、自分には推進力が足りていないということと、逆境の大切さを認識することができた。

以上のように、全 14 回という限られた授業回数ではあるが、ゲスト講師の経験した実例をもとに、学生はコミュニケーションを行う道具としての英語の役割や重要性を認識し、異文化に対する理解と新たな気づきを得ることと同時に自身のアイデンティティを理解することの重要性を認識している。本講座を通じ、海外に目を向け、異なるバックグラウンドを持つ人々との交流や海外生活での学びに強い意欲を示していることが明らかになった。

3.9 考察

質的調査結果からは、オムニバス形式の講義が学生の留学に対する意識に変化をもたらすことがわかった。学生はコミュニケーションの道具としての英語の習得や、異文化社会の中で生活する上での自身のアイデンティティを確立することの重要性、強い行動力や積極性を持つことの重要性を認識するようになった。筒井・船山 (2015) は、「グローバル人材として成長するための行動へと最終的に導くためには、目標を教育者や国から押しつけられるのではなく、その大学生自身がただ単に目標を定めるだけでなく、その前にしっかりと自己について考えるように促すことが肝要である」³⁾と自己理解の重要性について述べている。筒井・船山 (2015) が述べている自己理解の重要性において³⁾、本講座は学生の意識に大きな変化を促しているといえる。

一方で、量的調査結果からは、授業初日と最終日で学生の留学形態、留学希望先国、留学目的などについて大きな意識の変化が見られず、学生の具体的な行動計画にまで影響を与えているとは言えない。第 1 志望の将来の就職希望先や進路についても講義初日と最終日を比較すると、変化が見られなかったが、第 2 志望の将来の就職先や希望進路については大きな変化が見られた。新見 (2015) が行ったオーストラリアへの短期留学に参加した学生を対象とする調査結果によると、参加者自身が様々な課題に対し、「自ら乗り越えていくように促し、そのような経験から培われた自信が、将来の仕事上で、海外における業務を志し、対応していく意欲を養う上で役立つ」⁴⁾と述べる。また、横須賀 (2017) が行った日本人学生と留学生が経験したインターンシップ後のキャリア意識に関する調査結果において、「日本人学生の業界や企業に関する情報は、幼少

期から両親などの身近な他者と共有する育成環境の中で見聞きしたり、自身の直接的な体験から得たりしたもの」⁵⁾であると論じる。学生の育成環境の中で将来の就職希望先に関する情報が蓄積されるのであれば、14 回のオムニバス形式の講義型授業だけでは、学生のキャリア意識に影響を与えることには限界があると考ええる。オムニバス形式の講義を通じ変化した学生の意識を、留学形態や留学希望先等の具体的な行動へと移すためには、学生が次の目標に向かってどのような行動を取るべきかを明確にすることが必要になると考えている。

4 おわりに

4.1 今後の課題

本調査では、無記名でのアンケート調査を実施したため、授業初日と授業最終日で各学生の留学意識にどのような変化が起きたのかについての追跡調査を行なうことができなかった。本講座を履修した学生を対象に、在学中に短期留学や長期留学への参加の有無や留学形態などについても追跡調査を行なう必要がある。個人情報の取り扱いに注意し、追跡調査の方法について今後の課題としたい。

また、今後は学生の習熟度に関する調査が必要である。江川・村上 (2013) は、オムニバス形式の授業形態のデメリットとして、教員と教員の授業間に統一性を持たせることは難しく、授業内容が広く浅くなることは避けられないと指摘する⁶⁾。また、オムニバス形式の講義と一人の教員が教える通常の学部生向け講義のメリットとデメリットについて Little・Hoel (2011) や Money・Coughlan (2016) が調査した結果、オムニバス形式の授業では、より深く洞察力を養成できるメリットがある一方で、講義テーマの重複、担当教員同士の意見の対立等がある⁷⁾⁸⁾。通常の一の教員が教鞭を取る授業形式のメリットは、講義テーマや教え方がぶれることなく、安定していることなどを挙げ、デメリットとして情報や知識の偏り等があると述べる。本講座のキーワードは「留学」であり、異なる海外留学経験を持つゲスト講師が講義を行うため、講義テーマの重複はないと考える。今後は、授業時間数が決まっているため、14 回の全講義で毎週ゲスト講師が入れ替わりで講義をするべきか、または隔週でゲスト講師が授業を行い、ゲスト講師の授業がない週は振り返り

のためのディスカッション形式の授業を行う授業形式を検討することも考えている。アメリカ等の海外の大学で開講しているオムニバス形式の講義では、毎週様々な分野のゲスト講師による 90 分間の講義が行われた後、学生が 15 人から 20 人程度のグループに分かれ、大学院生の教育助手 (TA) の主導のもとで講義の振り返りのためのディスカッション形式の 60 分間の授業が週 1 回行われる。講義形式の授業とディスカッション形式の授業を組み合わせることにより、学生の理解状況を確認することができる。今後、講義の振り返りのためのディスカッション形式の授業を導入することの有効性を調査し、効果的な実施に向けて検討する必要がある。

本学では、留学経験で得た能力や知識をどのように今後の人生の中で応用すべきかを学生一人ひとりが考え、キャリア設計を行う上で留学が果たす役割を客観的に分析する機会を今後も提供するため、引き続きオムニバス形式の講座を実施する予定である。大学卒業後、社会人として国際的に活躍できる人材としての土台を築くためにも、生まれ育った環境とは全く異なる環境の中で得た経験や人格的な成長の機会を得ることができる「留学」が果たす役割は大きいと考える。本講座を受講した一人でも多くの学生が、日本にとどまらず世界を舞台に活躍することを切に願い、本講座のコーディネートを担当している。

引用・参考文献

- 1) 株式会社ディスコキャリアリサーチ. (2017) 海外留学生のキャリア意識と就職活動状況. 1-12.
<http://www.disc.co.jp/uploads/2017/04/cfn201704.pdf> (2017 年 11 月 28 日参照)
- 2) ICC 国際交流委員会. (2017) IBC キャリア調査アンケート.
<http://www.iccworld.co.jp/corporate/wp-content/uploads/2017/02/IBP-careerpress-release-2017.2.pdf> (2017 年 12 月 1 日参照)
- 3) 筒井久美子・船山和泉. (2015). 自己理解にもとづく「グローバル人材育成」(レゴワークショップを活用したモチベーション喚起). グローバル人材育成教育研究. 2(2). 1-13.
- 4) 新見有紀子. (2015). 短期海外留学経験が就職・進路に関する意識に与える影響について: 帰国後インタビューからの考察. 留学生交流・指導研究. Vol.18. 31-44.
- 5) 横須賀柳子. (2017). 外国人留学生のインターンシップ参加を通じたキャリア検索. グローバル人

材育成教育研究. 4(1, 2), 31-42.

- 6) 江川陽介・村上純一. (2013). 1 年次生へのオムニバス授業導入の意義と課題—教育学専攻専門科目「人間と教育」FD アンケート結果の分析—. 国士館人文学. Vol.45, 125-136.
- 7) Little, Amanda & Hoel, A. (2011) Interdisciplinary Team Teaching: An Effective Method to Transform Student Attitudes. The Journal of Effective Teaching. 11 (1), 36-44.
- 8) Money, A. & Coughlan, J. (2016) Team-taught versus individually taught undergraduate education: a qualitative study of student experiences and preferences. Higher Education. 72 (6), 797-811.

付録

[1] 調査紙

【問 1】当てはまるものを 1 つ選び○をつけてください。

学年: ① 1 年生 ② 2 年生

【問 2】一番興味がある留学形態はどれですか。1 つ選び○をつけてください。

- ① 協定校への交換留学 (半年～1 年間)
- ② 休学して私費留学 (半年～1 年間)
- ③ 短期海外語学研修 (夏休みや春休み期間)
- ④ 短期海外インターンシップ (2 週間～4 週間)
- ⑤ 長期海外インターンシップ (6 ヶ月程度)
- ⑦ その他

【問 3】留学したい国はどこですか。1 つ選び○をつけてください。

- ① 東アジア (中国, 韓国等)
- ② 東南アジア (シンガポール, タイ等)
- ③ 北米 (アメリカ合衆国・カナダ)
- ④ ヨーロッパ (フランス, ドイツ等)
- ⑤ 東欧 (ロシア等)
- ⑥ オセアニア (オーストラリア, ニュージーランド等)
- ⑦ 中南米 (メキシコ, ブラジル等)
- ⑧ アフリカ (南アフリカ, ケニア等)
- ⑨ その他

【問 4】海外留学を希望している場合、留学の目的は何ですか。下記より 3 つ選び○を付けてください。

- ① 語学力を向上させるため
- ② 異文化の中での生活を通じて、視野が広がると思うから
- ③ 行動力や自信などをつけるため
- ④ コミュニケーション能力を高めるため
- ⑤ 国内外のグローバル企業に就職したいから
- ⑥ 就職に有利だと思うから
- ⑦ 周囲の人たちとは違う経験をしたいから
- ⑧ 外国人の友人を作るため
- ⑨ 海外で働きたいから
- ⑩ 専門知識を身につけるため
- ⑪ 国際感覚を身につけたいから

⑫その他

【問5】留学に対する不安や心配なことは何ですか。下記より3つ選び○をつけてください。

- ①語学力不足が不安である。
- ②留学費用が心配である。(経済的な理由)
- ③留学した場合、4年間で卒業できるかどうか不安である。
- ④留学先での勉強についていけるかどうか不安である。
- ⑤現地での生活に順応できるかどうか心配である。
- ⑥就職活動などの時期との兼ね合いが不安である。
- ⑦親や家族が理解してくれるかどうか不安である。
- ⑧不安なことは特にない。
- ⑨その他

【問6】将来、あなたが目指す就職先や進路について、下記より第1志望と第2志望を選び、番号を記入してください。

第1志望：_____ 第2志望：_____

- ①日本企業 (海外勤務の可能性あり)
- ②日本企業 (海外勤務の可能性なし)
- ③外資系企業 (海外勤務の可能性あり)
- ④外資系企業 (海外勤務の可能性なし)
- ⑤海外で働きたい
- ⑥大学院進学 (日本国内の大学院)
- ⑦大学院進学 (海外の大学院)
- ⑧その他

【問7】海外留学を検討する際に、必要だと思うサポートは何ですか。下記より選び、○をつけてください。(複数回答可)

- ①本講座のような留学準備講座の提供
- ②留学準備のためのカウンセリングや相談
- ③短期留学や長期留学に関する留学説明会
- ④留学経験のある学生による留学相談会
- ⑤サポートは特に必要ない
- ⑥その他

受付日 2018年1月11日、受理日 2018年3月10日